



北海道十勝平野、 池田町

厳しい自然は、否応なく池田町民を痛めつけた。昭和31年、池田町は赤字自治体として財政再建団体の指定を自治省から受ける。その責任をとつて現職町長が辞任。後任として助役一本化無投票と思われたとき、39歳の若者が立候補を表明した。支持団体はナシ。農家の若手だけが頼りの必敗の布陣。しかし、フタをあけるや、73票差当選。もちろん町議会議員全員が反対派。そんな状況から、池田の町づくりは始まつた。ときに昭和32年である。



町長 記

我が町はいろいろと問題を抱えつつも、町政に滯りは許されない。今滞れば、そのツケは子どもたちの時代に払うことになる。それはしてはいけないことだ。

厳寒の原野に自生する野ブドウ。それに目をつけたワイン造り。冷害による全滅を経ながらも、若者は町長を支え続けた。町営ワイナリー、町営レストラントン、町営牧場による肥後あか牛3000頭の飼育、池田牛ブランドの確立、販売。今やその売り上げは、年間約23億円にのぼっている。施策の真の成果と評価は、まさに20年後なのである。

当時、「大ボラ吹き」「大ぶろしき」と陰口をたたかれたこの男、丸谷金保。池田を日本一の町にしたこのすばらしき「大バカヤロー」丸谷金保の物語は、私に勇気を奮い立たせる。夢を語ることは楽しいが、その夢を実現することは、もっと楽しいのである。